

## 嘗試期の中國新詩壇

倉 田 貞 美

梁啓超等の自由思想の洗禮を受け、嚴復の英國功利主義の譯書の影響を蒙り、或は林奕華等の許多の翻譯小説を耽讀し、「富國強兵」たる時代潮流のまにまに、日本米國等に留學の幾年を送り、多量に新思想を吸収した青年達が、辛亥革命の勃發に狂喜して、次第に歸國する者その數を増すに至つて、袁世凱洪憲帝と稱したり、北洋軍閥が彼を承襲して自由思想を壓制したりしたけれども、それ等の壓迫も、所詮自由思想の勃興を抑遏する力を有しなかつた。

而して、民國四年九月十五日上海に出現した、陳獨秀主編の「青年雜誌」（後に「新青年」と改稱す）こそは、かゝる時代の使命を擔つて生れ出たものであつた。當時彼等は宣言して言つた、「我々は、世界各國の政治上道德上經濟上困襲せる舊觀念の中に、許多進化を阻礙し情理に合はざる部分の有る事を信する。我々は、社會の進化を求めんとすれば、天經地義を打破せざるを得ないと考へる。古より斯の如き成見は、きまつて一面此等の舊觀念を拋棄し、一面前代の賢哲當代の賢哲と、我々自身考へる所の創造上道德上經濟上の新觀念とを綜合し、新時代の精神を樹立し、新社會の環境に適應せしめん事を計るものである。我々理想の新時代、新社會は、誠實な、進歩的な、自由な、平等な、創造的な、美しき、善き、平和な、相愛の、互助の、勞働して愉快な、全社會幸福なものである。かの虚偽な、保守的な、消極的な、束縛ある、階級的な、因襲的な、醜き、惡き、戰爭的な、軋轢ありて不安な、懶惰にして煩悶ある、少數幸福な現象が、次第に減少して消滅するに至らん事を希望する。」（新青年宣言）と。かくて、陳獨秀も「人々が本誌を非難

する所のものは、孔教を破壊し、禮法を破壊し、國粹を破壊し、貞節を破壊し、舊倫理（忠孝節）を破壊し、舊藝術（中國戲）を破壊し、舊宗教（鬼神）を破壊し、舊文學を破壊し、舊政治（特權人治）を破壊する、この幾條の罪案に非ざるは無し。この幾條の罪案は、本社同人の當然素直に認めて諱まざるものである。だが、本を追ひ源に溯れば、本誌同人には本來罪無く、只かのデモクラシイとサイエンス兩先生を擁護せんが爲に、そこでこの幾條滔天の大罪を犯したわけなのである。かのD先生を擁護せんとすれば、即ちかの孔教、禮法、貞節、舊倫理、舊政治に反對せざるを得ず、かのS先生を擁護せんとすれば、即ちかの國粹と舊文學に反對せざるを得ない。」（新青年罪案之答辯書）と述べて居る如く、民主主義と科學精神とを思想的根幹と爲し、すべての舊きものを破壊し、新時代新社會を建設せんと企圖したのである。

更に七年十二月、陳獨秀達は「每週評論」を刊行し、次いで八年一月、傅斯年、羅家倫等「新潮」(The Renaissance)を創刊し、「新青年」のこの主張、世に所謂「新文化運動」を促進したのである。「新潮發刊趣旨書」を見ると、「今日出版界の職務、國人本國學術に對する自覺心を喚起するより先なるは莫し。今試みに、當代思想の潮流如何？中國の此の思想潮流中に於ける位置如何？と尋ねれば、國人は正に茫然昧然として、未だ天の高さ地の厚さを辨ぜざるが如くならん。その自用を敢えてする者は、本國學術は世界の趨勢を離れて獨立し得べしと謂はむ。夫れ學術には元來所謂國別無く、更に方土を以てその質性を易へず。今中國を世界思想潮流より外にすれば、實に自ら人生より絶つのみならず、既に現在に於て不満とする所あり、自ら未來に於て、努力獲求する能はず。この因循を長ずれば、何れの時か且に達せん。その由る所を尋ねれば、皆西土文化の美隆彼の如くなるを辨せず、又今日中國學術の枯槁此の如くなるを察せざるに緣る。人に於て已れに於て、兩つながら知る所無し、因つてその形穢きを自覺せざるなり。同人等おもへらく、國人宜しく最も先に知るべき者四事有りと。第一、今日世界文化如何なる階級に至れるや？第二、現代思潮如何なる趣向に本づきて進めるや？第三、中國の情狀現代思潮を去る遼闊の度如何？第四、如何なる方術を以て中國をば思潮の軌道に

納るるや？この四者を持して刻刻心に在り、然る後本國學術の地位に對して自覺心有りと言ふべく、然る後漸漸とこの『塊然獨存』の中國を導引して、同じく世界文化の流れに浴せしむべきなり。これ本志の第一責任なり。」と述べて居るが、當時に於ける「新文化運動」の目的が那邊にありしかを明白に知る事が出来よう。

さて、この「新文化運動」に於て、孔教問題について着手され、最も反響を呼んだものが、かの「文學革命」の提倡であつた。胡適が新青年二卷五號（六年一月）に發表した「文學改良芻議」をその最初の投石とし、翌月陳獨秀「文學革命論」を掲げて、その主張を更に鮮明にしてより、所謂「文學革命運動」はその過激を擴大して行つた。

その主張を胡適に聽くに、「文學改良は須らく八事より着手すべし。八事とは何ぞ？一に曰く、之を言へば物有るべし。二に曰く、古人を摹倣せず。三に曰く、須らく文法を講求すべし。四に曰く、無病の呻吟を作さず。五に曰く、務めて爛調套語を去る。六に曰く、典を用ひず。七に曰く、對仗を講ぜず。八に曰く、俗字俗語を避けず。」と言ひ、又、第八項俗字俗語を避けずの下で、「今世歴史進化の眼光を以て之を觀れば、則ち白話文學が中國文學の正宗爲り、又將來文學必用の利器たる、斷言すべきなり。」と、白話文學を中國文學の正宗なりと斷言してゐる。

陳獨秀は、「文學革命軍の大旗を高張し、以て最初に義旗を擧げたる急先鋒胡適の聲援を爲し、旗上わが革命軍の三大主義を大書特書す。曰く、彫琢の阿諛の貴族文學を推倒し、平易の抒情の國民文學を建設す。曰く、陳腐な鋪張な古典文學を推倒し、新鮮な立誠な寫實文學を建設す。曰く、迂晦な艱澀な山林文學を推倒し、明瞭な通俗的な社會文學を建設す。」と主張し、「今日わが國の文學悉く前代の敝を受く。所謂『桐城派』なる者は、八家と八股との混合體なり。

所謂『駢體文』なる者は、思綺堂と隨園との四六なり。所謂『江西派』なる者は、山谷の偶像なり。」と、當時の文詩壇の牙城を攻撃した。

勿論、胡適は當時米國に在つて農科を修め、哲學を研究しつつあつた一青年學徒であり、陳獨秀もわが國に於て速成的教育を受けた者であつたから、深き文學的素養を有して居たとは云へなかつた。したがつて、これ等の論もかの梁啓

超のその如く、文化批判者の立場から爲されたものであり、當然幼稚にして淺薄、論議すべき多くのものを有して居るが、すべて革命事業なるものは、かうした果斷な大まかな素人によつて草創の第一歩を踏み出す事が、多くの場合の通例であり、その論の當不當を問題にするよりは、新しきものを創造せんと意欲する、その青年的熱意を重視すべきであらう。

同じく六年、陳獨秀は北京大學校長蔡元培に聘せられて文科學長と爲り、胡適又米國より歸國し、同じく北京大學に講座を持つに至つて、同大學内の教授達、錢玄同、沈尹默、劉復、李大釗、周作人、魯迅等彼等と互に相呼應し、互に相討論し、學生傅斯年等またこれに和し、次第にその主張も鮮明の度を加へ、理論も進歩した。錢玄同の「與陳獨秀書」、劉半儂の「我之文學改良觀」等はやゝ進歩せる論であつた。併し、七年四月出版の「新青年」第四卷第四期所載の、胡適の「建設的文學革命論」を以て、この二年間の總結論と見做してもよいであらう。その中で、彼は「私の新文學建設論の唯一の宗旨は只十個の大字、『國語の文學、文學の國語』である。死文字は、決して活文學を産出する事は出来ない。簡単に云へば、三百篇より今に到るまで、中國の文學にして、凡そある價值を有し、ある生命を有するものは、すべて白話のものであり、或は白話に近いものである。中國が若し活文學を有せんと思ふならば、必ず白話を用ふべきであり、必ず國語を用ふべきであり、必ず國語の文學を作るべきである。」と述べてゐるが、最も根本的な、適切な文學革命の宣言であり、多くの論者の主張を歸納したものと稱して差支へない。

以上、白話詩の生起を語る準備工作として、「新文化運動」、「文學革命運動」の提倡に就いて簡単にその主張を紹介したのであるが、次にいよいよ白話詩の生誕とその乳兒時代について、概観してみたいと思ふ。

## 二

舊文學を破棄し、「國語の文學」を建設せんとした文學革命運動の、その建設方面に於ける第一着手が、所謂白話詩の嘗試であつた。

ここで云ふ白話詩が何時頃から創作されつつあつたかと云ふ事は、尙詳細な研究を要するが、胡適が試みに白話詩を作つてみたといふ五年頃からだとしても、當らずと雖も遠からずと云ふべきであらう。とにかく、それが刊物上に現れたのは、六年二月「新青年」第二卷第六期の、胡適の「白話詩八首」であつた。「朋友」「贈朱經農」「月三首」「江上」「孔丘」がそれである。だが、それらは白話詩などと銘打たるべき代物ではなかつた。七年一月「新青年」第四卷第一期上に掲載された胡適の「鴿子」「人力車夫」「一念」「景不徙」、沈尹默の「鴿子」「人力車夫」「月夜」、劉半農の、「相隔一層紙」「題女兒小蔥過歲日造象」等を、白話詩と稱すべき最初の作品と考へてよからう。

今、胡適の「鴿子」と沈尹默の「人力車夫」を例示して、當時の新詩が如何なる程度のものであつたかを知るよすがとしよう。

鴿子

胡適

雲淡天高、好一片晚秋天氣！

有一羣鴿子、在空中遊戲。

看他們三三兩兩、

廻環來往、

夷猶如意、

忽地裏、翻身映日、白羽襯青天、十分鮮麗！

人力車夫

沈尹默

日光淡淡、白雲悠悠、

風吹薄冰、河水不流。

出門去、雇人力車。街上行人、往來很多；車馬紛紛，不知幹些甚麼。

人力車上人、個個穿棉衣、個個袖手坐、還覺風吹來、身上冷不過。

車夫單衣已破、他却汗珠兒顆顆下墮。

これ等の詩は、既に胡適も云つた如く、（談新詩）胡適の作品には「詞調甚だ多く」、沈尹默の詩は「古樂府より化成したものであり、この『人力車夫』の詩も『孤兒行』一類の古樂府に力を得たものである」ことは明白である。

當時「新青年」「新潮」等にな詩を發表した人々は、前三者の外、唐侯（魯迅）、餘平伯、陳衡哲、沈兼士、李大釗、周作人、葉紹鈞、羅家倫、傅斯年、康白情、顧誠吾等々であつた。

彼等は舊詩詞の教養を比較的豊富に有して居たから、「はつきりと方向を見定めて、『解放』に向つて進まんと努力したけれども、舊詩詞の鏽鏤枷鎖を打破することは容易でなかつた。」（胡適、「蕙的風序」）したがつて、新詩とは云ふものの、「大部分は只あるものは古樂府式の白話詩であり、あるものは擊壤集式の白話詩であり、あるものは詞式と曲式の白話詩であり、——すべて真正の新詩であるとは考へられないものであつた。」（同上）過渡期的作品として、詩史的興味はあるけれども、多くは非詩であり、駄詩であつた。勿論革創期的現象として容認すべきであらうが、彼等の多くが、詩人的素質を有しなかつた事もその佳品を産まなかつた理由の一つである。

彼等の作品を、詩的経験と稟才との所有者であつた清朝遺老の詩人達、及び黃遵憲を導師と仰いだ所謂「新派」の青年詩人達の手になつた舊體詩と比較すれば、詩と名づくべく餘りに貧弱であつた。後年彼等白話詩の嘗試者達の多くがこの頃攻撃の砲火を浴びせた舊詩へ逆戻りする悲喜劇を演じたのも、當然と云へば當然な現象である。

胡適は後に（九年三月）「嘗試集」を亞東圖書館より出版し、詩人と稱せられたりしたが、元來彼は詩人たるの素質

を有せず、「嘗試集」も最初の新詩集（舊詩をも合せ收む）としての意義を持つのであり、何等藝<sup>も</sup>なき作品の堆積に過ぎない。結局、彼は新文學運動のリーダーとして、新思想の啓蒙家として、白話詩のいち早く嘗試者として考へるべきであらう。

さきに私は、當時の新詩の作者を嘗試者の群と爲し、その詩は多く駄詩であり、非詩であると云つた。併し、この草創期の新詩壇に新時代の新感情を盛つた佳品を發表し、後來の詩壇に多大の影響を及ぼした二詩人が居た。周作人と康白情とがその例外的存在である。

周作人が「新青年」第六卷第二期に掲げた「小河」の長詩は、當時最も傳誦されたものであり、現在に於ても名作として推稱を受けて居るものである。例へば、胡適は「新詩中第一の傑作」（談新詩）と激稱し、鄭振鐸また、「その優美現在に到つてもまだ能く追及する人がない様だ。」（殉悽集）と讃辭を呈して居るが如き、その一例である。

### 小河

一條小河、穩穩的向前流動。

經過的地方、兩面全是烏黑的土、

生滿了紅的花、碧綠的葉、黃的果實。

一個農夫背了鋤來、在小河中間築起一道堰。下流乾了、上流的水被堰攔着、下來不得、不得前進、又不能退回、

水只在堰前亂轉。

水要保他的生命、總須流動、便只在堰前亂轉。

堰下的土、逐漸淘去、成了深潭。

水也不性這堰、——便只是想流動、

想同從前一般、穩穩的向前流動。

一日農夫又來，土堰外築起一道石堰。

土堰坍了，水衝着堅固的石堰，還只是亂轉。

堰外田裏的稻，聽着水聲，皺眉說道——

「我是一株稻，是一株可憐的小草，

我喜歡水來潤澤我，

却怕他在我身上流過。

小河的水是我的好朋友，

他曾經穩穩的流過我面前，

我對他點頭，他向我微笑。

我願他能够放出了石堰，

仍然穩穩的流着，

向我們微笑，

曲曲折折的儘量向前流着，

經過的兩面地方，都變成一片錦繡。

他本是我的好朋友，

只怕他如今不認識我了，

他在地底裏呻吟，

聽去雖然微細，却又如何怕！



這不像我朋友平日的聲音，  
被輕風攙着走上沙灘來時，  
快活的聲音。

我只怕他這回出來的時候，  
不認識從前的朋友了，——  
便在我身上大踏步過去。  
我所以正在這里憂慮。

田邊的桑樹，也搖頭說，——

「我生的高，能望見那小河，——

他是我的好朋友，

他送清水給我喝，

使我能生肥綠的葉，紫紅的桑葚。

他從前清澈的顏色，

現在變了青黑，

又是終年掙扎，臉上添出許多痙攣的皺紋。

他只向下鑽，早沒有工夫對了我的點頭微笑。  
堰下的潭，深過了我的根了。

我生在小河旁邊，

夏天曬不枯我的枝條，

冬天凍不壞我的根。

如今只怕我的好朋友，

將我帶倒在沙灘上，

拌着他捲來的水草。

我可憐我的好朋友，

但實在也爲我自己着急。」

田裏的草和蝦蟆，聽了兩個的話，

也都歎氣，各有他們已的心事。

水只在堰前亂轉，

堅固的石堰，還是一毫不搖動。

築堰的人，不知到那里去了。

私はこの詩を別に傑作だとは考へない。彼自身も「過去的生命」の序で、「これらの『詩』の文句は、すべて散文的なものであり、内中の意志も亦甚だ平凡である。したがつて、真正の詩として看れば當然非常に失望するであらう。」と云つて居るが、單に文句が散文的であるだけでなく、そこには何等詩情の昂揚も感ぜられない。勿論詩人の作ではなく、文學に造詣深き者の習作に過ぎない。併しながら、「私は能く當時の情意を表現し得て居ると信ずる。」と彼も云つて居る如く、自我に目覺めたる當時の知識階級の青年達が、牢固として抜く能はざる封建思想を前にして、傳統の中に無自覺に生活を營みつつある國人に憐憫の情を寄せ、自覺を切望し、反面白らの行手を眺めやる、その感慨が、象徴的に語られて居ると思ふ。尙、彼は當時の日本文學特に白樺派の文學の影響を受け、人道主義の文學の提倡者であり、當然彼の

詩には人道主義の色彩が濃厚である。わが白樺派の同人にして、人類愛の詩人などと稱揚された、かの千家元麿の作品を譯した事もあり、元麿の影響などもあつたと云つてよい。

然も、この人道主義——周作人は、「決して世間の所謂慈善主義ではなく、乃ち一種の個人主義的人間本位主義である。」（『人的文學』）と云つて居るが——は實に當時の「時代の聲」であり、今に至つても新詩の特色の一である。（『朱自清、大系詩集導言』）既に掲げた沈尹默の「人力車夫」によつても分る如く、胡適等の詩にもこの思想が多分に現れてゐる。五四事件以後續出した所謂「文學研究會」の詩人は、すべて周作人の亞流であると云つても差支へない。後年彼は、革命文學華かなる頃、人道主義の範圍を出でざるものとして、反革命者として、甚しくは資産階級の說教者として、非難され攻撃されたけれども、彼の中國文藝思想界に對する業績は莫大である。彼を忘れては、中國の現代文學を語る事は出来ないと思つても、決して過言ではない。單に詩界への貢獻について見ても、詩歌の自然主義時代を現出したのも、所謂「小詩」の流行も、すべて彼に源を發したものである。歌謡研究を提倡したのも彼である。彼は詩人ではなかつたけれども、深い鑑賞と豊富な文學的才能とを以て、諸外國の許多の詩歌を譯出し、中國詩壇に新空氣を注入した事は、わが上田敏にも喩へられよう。

康白情は主として「少年中國」「新潮」に詩作を掲げ、當時最も喧傳された詩人であり、その年少詩人に及ぼした影響も少くなかつた。

送客黃浦、

我們都攀纜——風吹着我們的衣裳——

站在沒遮欄的船樓邊上。

黑沈沈的夜色

迷離了山光水暈，就星火也難辨白。  
誰放浮鐙？——劈劈是一葉輕舟？

卻怎麼不聞橈響？

今夜的黃浦，

明日的九江。

船呵，我知道備開前途，

儘直奔那逆流的方向！

這中間充滿了別意，

但我們只是初次相見。

と云ひ、

我想世界上只有光，

只有花，

只有愛！

我們都談著——

談到日本二十年來的戲劇，

也談到『日本的光、的花、的愛』的須磨子。

などとも云つてゐる「送客黃浦」の詩は、梁實秋が「絕唱」と推賞し、朱自清が「康白情氏の解放は徹底せるものと云ふべく、彼は能く我々の語言の好い音節を尋ね出してゐる。『送客黃浦』がそれだ。」と云ひ、趙景深も「現在でも忘れられないもの」として擧げてゐる。

併し、當時多くの人達が論じた如く、彼の詩の優れたものは所謂「寫景詩」に多い。胡適が「『江南』の長處は顔色の表現に在り、自由に外界の景色を實寫する在る。」（評新詩集）と評し、「この種の詩は近來流行となつた。」とも云つて居り、葉伯和が「後來専ら寫生の詩筆と自然の音節とを重んじ、『江南』『從連山關到祁家堡』等の詩が第二期に數へられよう。この期間の詩は多く排偶の句を用ひ、以て人をして整齊の美を感じしむるに足る。」（草兒在前集序）と評してゐる所の「江南」の一詩は中でも佳品であらう。梁實秋が康白情をが「設色の妙手」と稱した（農報副刊）所以も亦そこにあるのである。彼には十一年三月亞東圖書館出版の詩集「草兒」後「草兒在前集」と改稱す）がある。

### 三

胡適の「文學改良芻議」、陳獨秀の「文學革命論」等は、云ふまでもなく文學一般の改革意見書であり、漠然とは詩歌に對する見界をも知り得るが、具體的に詩歌に對する建白を爲した最初の人は劉半儂であつた。

劉半儂は「我之文學改良觀」（新青年第三期）の中で、「韻文の當に改良すべき者三」として、

第一曰、破壞舊韻、重造新韻。

第二曰、增多詩體。

第三曰、提高戲曲對於文學上之位置。

を擧げ、詳細に論じて居る。第三は戲曲に關する問題故、此處には論及する必要がないから、第一第二に關する論據を紹介すると、先づ第一では概略次の如く述べて居る。

即ち、「梁代沈約の造つた四聲譜が今日通用の詩韻であるが、それについては嘗て顧炎武も指摘した如く、既に舊文學上に於てもその存在資格を失つてゐる。又韻の本義は叶であり、我々はただその叶と不叶とを問ふのみで、舊譜の同韻であるか否か、相通するか否かを問題にはしない。西洋の作詩に於ても通韻があるが、聲音が決して相似ざる字を無理に一韻と爲してゐる事も、希臘羅馬の古音を用ひて今韻を押して居る事も聞かない。併し、舊韻が既に廢せられたとしてそこには一つの困難な問題が発生する。即ち、譜音を統一する事が出来ないがそれである。私はこの問題に對して、三つの解決法を有して居る。(一)作者は各土音について押韻し、作物の下に何處の土音なるかを注して明かにする。これは最も妥當でない方法だが、それにしても、今の土音には尙一つの落着く處があり、これを古音の全く把握する處が無いのに較べると、固より已に優つてゐる。(二)京音を以て標準と爲し、北京語に長ずる者が一新譜を造成し、京語を解せざる者をして遵依する所あらしめる。これは前法に較べてやや妥當であるが、それでもまだ善を盡してゐるとは云へない。(三)『國語研究會』の諸君が、調査して得た所を以て一定譜を撰し、之を世に行はん事を希望する。それで初めて善を盡し美を盡すのである。」と論じ、詩體を増多すべき所以を説いては、「嘗私はかう考へた。詩律が嚴になればなる程、詩體は愈々少くなり、したがつて詩の精神が受ける所の束縛は益々甚しく、詩學は決して發達する望みがない。」と云ひ、英佛二國の詩について比較論を試み、「胡君白話詩中の『朋友』他」の二首を、私は新文學の韻文を建設する動機であると認める。尙將來更に能く自ら造り、或は他種の詩體を輸入し、並に、有韻詩の外別に無韻の詩を増せば、形式方面に在つては、既に無數の門徑を添へる事が出来、以前の如く不自由でなく、その精神方面の進歩も、自ら一日千里の大速率が有るであらう。かの漢人は既に自ら五言詩を造りし本領を有し、唐人既に自ら七言詩を造りし本領を有した。我々にどうして五言七言の外、更に他種の詩體を造る本領が無いわけがあらう。」と述べてゐる。

大體に於て彼の論は正しい。彼のこれらの主張は當時に於ては創作に實現されなかつたけれども、後來の局勢は全く彼の主張の如くであつた。特に民國十四・五年頃の「新詩形式運動」に對しては、彼は先覺者としての位置を有するも

のである。彼には詩集「揚鞭集」(十五年十月出版)が有るが、詩作そのものは取るに足らぬ瓦礫の品である。併し、言語學的立場より爲されたる彼の詩論には傾聴に値するものがあつた。

更に劉半儂は「新青年」第三卷第五期に「詩與小説精神上之革新」と題する一文を掲載し、詩の精神は「眞」を以て主と爲すべきを強調し、舊詩の最大缺點は不眞に在り、虚偽に在り、その大患を治療する唯一の方法は「眞」に在ると論じ、「時代に古今有り、物質に新舊有れども、この『眞』の字のみは唯一無二、時代に随つて變化しないものである。」と述べた。當然な論ではあるが、大ざつばな感想に過ぎない。『詩歌の精神の改造に對する正確な主張』(星海)と孫俚工は賞讃してゐるが、當時に於てはさう云へない事もなからう。

劉半儂について、錢玄同また「嘗誠集序」を草し、(七年一月作「新青年」六卷五號所載)「現在白話を用ひて韻文を作るには二つの緣故がある。(一)今語を用ひて今人の精感を達するのが、最も自然であり、かの古語を用ひるものが、如何に好く作られて居ようとも、結局彫琢硬砌の缺陷あるを免れないのは較べられない。(二)舊いものを取除いて新しいものを陳列せんと計る爲には、舊文學の腔套を全部删除するものでなければ駄目である。」といひ、「現在白話の韻文を作るには、必ず當に全く現在の句調を用ひ、現在の白話を用ふべきである。」と云ひ、「文選派」「桐城派」をば、「白話文章を弄壞する二種の文妖である。」と痛撃して居る。前代の史的細部に無智な、文學の本質を辨へぬ暴論ではあるが、それだけによく新しき文學、新時代の詩歌を待望する熱意の程が看取されるとも云へよう。

次に胡適の「談新詩」について語らねばならぬ。

彼は「中國近年の新詩運動は一種の『詩體の大解放』であると云へよう。」と云ひ、詩體の解放を主張する所以を説明して、「この詩體の解放あつてこそ、豊富な材料、精密な觀察、高遠な理想、複雑な感情が始めて能く詩中に表現されるのである。五七言八句の律詩は決して豊富な材料を容れる事が出来ぬし、二十八字の絶句は決して精密な觀察を寫すことは出来ず、長短一定の七言五言は決して高深な理想と複雑な感情を傳達する事は出来ない。」と云ひ、更に「ただに五

言七言の詩體を打破するのみならず、並びに詞調曲譜の種々の束縛を推翻し、格律に拘らず、平仄に拘らず、長短に拘らず。」と主張した。又、詩の意節は全く「語氣の自然の節奏」と「毎句の内部に用ひる所の字の自然和諧」とによるものであつて、「句末の韻脚」「句中の平仄」などは重要なものではないと説き、用韻に關して「新詩に三種の自由がある。」と云ひ、「第一、現代の韻を用ひ、古韻に拘泥せず、更に平仄韻に拘泥せず。第二、平仄相押韻すべきは詞曲通用の例であり、單に新詩が此の如くであるだけではない。第三、韻が有るのとはより結構だが、韻が無いのも妨げない。新詩の聲調は既に骨の中——自然の輕重高下、語氣の自然區分——に在るが故に韻脚の有無はすべて問題には成らない。」と云つてゐる。尙彼は「詩は具體的な作法を用ふべきで、抽象的な云ひ方を用ひてはいけない。」と、最善の詩法は具體的描寫法であるとの意見を述べた。又彼は「哲理の詩」をも提倡した。

この胡適の主張は當時に於ける新詩の作者達の共同の信條であつたと考へてよく、「新潮」「少年中國」「星期評論」の詩人達も、「文學研究會」の作家達も、大體かうした信念で作詩したのであつて、この「談新詩」は殆んど詩の創作と批評との金科玉律となつたものである。

× × × × × ×

民國四年「新青年」が創刊されてより、「新文化運動」「文學革命運動」が提倡され、「每週評論」「新潮」等の雜誌世に出で、それらの刊物上に白話詩が掲載され始めた事は以上の如くであるが、傳統的社會の一角に現れるべくして現れたこの新興の漣漪をして、全國的な狂瀾怒濤と發展せしめたものはかの所謂「五四運動」であり、それ以前にあつては、論説を掲げ、創作を發表した者は、殆んど北京大學の教師學生に限られて居り、これらの諸雜誌も北京に於てすら一小部分の學生の同情を博したに過ぎなかつたのである。